春日神社

社報 春日神社

新 年 号（第二十八号）

発行日　平成30年１月１日

発行者　〒870－0031
大分市勢家町４－６－87
春日神社 宮司 宮本隆之
℡097－532－5638

題字　東郷平八郎

もくじ

宮司挨拶／祭典ごよみ
御社殿戦災復興五十年記念大祭
春日神社戦災復興五十年　第三部
神社研修旅行に参加して
敬神婦人会の活動
蓬萊雅楽会の活動
初詣のご案内／厄祓いのご案内

年頭のご挨拶

宮司　宮本隆之

新春を寿ぎ、謹んで聖上の弥栄と皆々様のご多幸をお祈り申し上げます。

さて、皇室会議が年末十二月一日に開かれ、同八日の閣議決定を経て今上陛下の御譲位、皇太子殿下の御即位の日程が定まりました。今上陛下におかせられましては本年御即位三十年を迎えられます。平成大嘗祭主基地方に治定されました私ども大分県民と致しましては、先ずは御即位三十年の奉祝行事を推進して参らなければならないと考えております。加えて御即位二十年の折、念願の御下賜となりました主基地方風俗舞ですが、本県神社界において絶えることなく継承していくことを重ねて周知致すべき時と存じます。また当社では二年ごとに皇居勤労奉仕活動を行っています。此の度御譲位の日程が決まりましたことから、今上陛下御在位中に次回の実施を計画しております。

昨年は当社御社殿戦災復興五十年の年に当たり、殿内の吊灯籠・門帳・壁代などの調度品を新調、また社殿外部の塗装替え及び金具の鍍金直しを行う等、継続的に行っています境内整備の中心となる本社殿が美しく蘇りました。十月十九日に秋季大祭に併せ復興五十年記念大祭を斎行、あらためて先人の真心に思いを馳せながら、平素よりご崇敬いただいています皆様方の赤誠の賜物と感謝申し上げますとともに、鎮守の杜をはじめ境内を訪れる方々をいつも清々しく迎えられるよう、今後共職員一同努力して参ることを肝に銘じた次第であります。

最後になりましたが、新しい年を迎え貴家皆様方のご多幸とご繁栄をご祈念申し上げ、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

祭典ごよみ

一月　一日　歳旦祭
元旦にあたり、皇室の弥栄と国家の繁栄、氏子崇敬者の幸せをお祈りします。

二月　七日　初午祭（摂社　稲荷神社）
本殿の西側に鎮座するお稲荷さんの例祭です。

二月十一日　紀元祭
日本の国の誕生を祝う祭典です。雅楽の伴奏で国歌を斉唱します。

二月十七日　祈年祭
本来は農耕儀礼に基づくお祭りですが、今日では稲作のみならず殖産工業すべてに亘って、この一年間の恵みを願う祭典です。

四月十二日　春季大祭宵祭
春の大祭のうち、前日祭です。二日間にわたり庄内神楽が奉納されます。

四月十三日　例祭
神社で一番重要な祭典です。神社本庁からの献幣使を迎えて執り行われます。

四月二十九日　昭和祭
昭和天皇の御誕生日にあたり、御聖徳を仰ぐ祭典です。

五月　一日　摂社金比羅社祭
本殿東側に鎮座するこんぴらさんの例祭です。

御社殿戦災復興五十年記念大祭

当社は大戦時下の大分空襲によって焼失した社殿の復興造営事業を昭和四十二年に完遂してから、平成二十九年をもって五十年の節目を迎えました。それに先立つ昭和三十八年三月、大分市・鶴崎市・大南町・大分町・大在村・坂ノ市町の六市町村が合併して新しい「大分市」が成立。翌三十九年に新産業都市の指定を受け、戦争によって破壊された工業をたてなおし、農林・水産業を中心とする産業構造からの転換が官民一体となって進んでいきました。ここに至り、市街の急速な発展に伴って増加する参拝者を迎え入れる風格を備えた県都大分市の総氏神にふさわしい社殿をと、氏子崇敬者をあげて造営事業の機運高まり、昭和四十二年悲願でありました御社殿復興を果たしました。復興を記念する奉祝行事は三日間に亘って行われたのです。

この節目の年を記念して五十年前と同じく十月十九日、秋季大祭に併せて戦災復興五十年記念大祭を斎行して、先人の労苦を顕彰いたしました。

記念事業

本殿を含めた社殿全体の塗装替えを行った他、六葉等飾り金具の鍍金直し、殿内は吊灯籠や門帳の新調を行いました。塗装替えによって晴れた日は特に社殿の白と赤の鮮やかさが際立つようになりました。工事期間中、参拝の皆様にはお参りの際に何かとご不便をおかけいたしました。おかげをもちまして、殿内もより清廉さを帯び、春日の杜に包まれた社殿全体の美しさが増して、一層厳かな佇まいとなっています。

記念大祭・祝賀会

十月十九日の戦災復興五十年記念大祭当日。清雨の中、県内神社関係者、当社責任役員総代、敬神婦人会および氏子青年会等が拝殿に着席。午前十一時より記念大祭を斎行いたしました。開扉、献饌、宮司祝詞奏上のあと、当社巫女による豊栄舞に続き、参列の各代表者の玉串拝礼が行われました。

祭典後、記念写真の撮影に続いて、参集殿に移動し祝賀会を開催。まず宮本宮司が「本日神社の歴史に刻まれた戦災復興五十年という節目は、今日までの先人たち並びに氏子崇敬者の皆様のご奉賛、大神様への赤誠の真心による出来事」と感謝の辞。「今後もより一層御神威の発揚と地域の平安を祈り、職員一同懸命に奉仕に努めたい」と改めて神明奉仕への決意を述べました。

次に社務所参集殿造営事業奉賛会会長・大分県神社総代会会長安藤昭三様、並びに宇佐神宮宮司小野崇之様からご祝辞を頂きました。

次いで八鹿酒造による鏡開きが行われたあと、大分県神社庁大分支部長・大将軍神社宮司佐藤成己様の発声で乾杯。和やかな懇談に移りました。

奉祝行事「国風歌舞と管絃・舞楽」

記念大祭後の午後六時半より「国風歌舞と管絃・舞楽」として、奉祝の神賑い行事を企画しておりましたが、本殿前特設舞台での奉納は切れ目なく降る雨により心惜しくも中止とし、総代・敬神婦人会など関係者のみ立会いのもと、参集殿での神前奉納となりました。

まず国風歌舞（くにぶりのうたまい）として、「平成大嘗祭主基地方風俗舞（へいせいだいじょうさいすきちほうふぞくまい）」が同保存会員によって演奏されました。続いて、蓬莱雅楽会による管絃「平調音取」「越殿楽（えてんらく）」「陪臚（ばいろ）」、そして舞楽「陵王（りょうおう）」「落蹲（らくそん）」の奉納となりました。

中でも主基地方風俗舞はその経緯から大分県の宝ともいうべき歌舞で、現在は主基斎田ゆかりの玖珠町瀧神社でのみ定期奉納されていることから、この記念大祭に合わせての神前奉納は当社初の試みとなりました。伝承は県内神職を中心とした風俗舞保存会によって行われており、毎年活動を重ねてきています。氏子崇敬者を始め多くの方々にこの風俗舞を知っていただくためにも、ぜひとも再度の奉納を期待したいところです。

この度、長時間にわたる記念行事でありましたが、関係の皆様の御協力・御奉仕を賜り、記念大祭共に滞りなく斎行することができました。此処に厚く御礼申上げ、御報告とさせて頂きます。

～平成大嘗祭主基地方風俗舞～

天皇陛下のご即位の際、初めて八百万の神たちと共に新穀を饗する大嘗祭（だいじょうさい）という重要な神事があります。これに先立って、日本の東・西の各地方からその新穀をお供えする県がそれぞれ一か所ずつ占いによって定められます。そしてその新穀を供納する地方の特色を織り込んで歌舞が作られ、大嘗祭にて新穀と共に神前に奉納されているのです。平成の御代、今上陛下御即位御大典の大嘗祭では大分県が新穀を供納する主基（すき）地方に卜定（ぼくてい）されました。歌には県下の名勝四か所（九重高原・高崎山・姫島・岡城跡）の短歌が詠まれ、これに作曲作舞されたものが平成度の風俗舞です。長くご下賜を熱望しておりましたが、平成二十一年に至り宮内庁より継承が行われました。

戦災復興事業竣功奉祝祭

春日神社戦災復興五十年　第三部

大東亜戦争
～市民に愛された社殿の焼失～

春日神社御社殿戦災復興五十年の節目の年を迎えるにあたり、当社報上に連載いたしました宮本末彦先々代宮司の手記も、今号で最終の部となりました。今回掲載分では、現社殿を含めた神域復興造営への具体的な道のりが描かれています。その道のりはこの度の戦災復興五十年の秋に至る社史でもあり、未来への標でもあるという思いを留め、本掲載の了と致します。

時に昭和三十六年は、貞観二年国司藤原世数が奈良の春日大社の御祭神を勧請し奉りてより一千一百年に当たるので同年十月十九日御遷座一千一百年式年祭を斎行した。これを契機として復興造営事業を発足したいと思い、当日奉祝会の席上これを発表した。

爾来三ヶ年、概算見積すること三回、設計構造図を作製すること二度、幾度か協議を重ねたが、なかなか成案を得ることが出来なかった。というのは神社の建造物は数百年の長きに亘って保存され、地域社会の崇敬の対象となるものであるから、それ相応の威容を備え又十分に環境が整備されなければならないからである。当社は大分市における最も古い歴史を有する神社にして、古く鎌倉時代より府内の総社として歴代藩主を始め、地域

庶民の崇敬厚く、現代においても旧市内はいうまでもなく急速に発展する新市街地からも初詣、七五三宮詣、その他旧に倍し日々の参拝者が多い状態であるから、これに対応する風格を有するものでなければならない。従って他の建築に比べて数倍（木造のときは十倍）の経費を要し、総額数千万の巨額に上るのである。神社にはこれに充当する資金は皆無であって、氏子崇敬者よりの浄財寄付に頼る外に道はない。しかしそれにも自から際限があって全額寄付を求めることは到底できそうもない。度々協議を重ねた結果、甚だ遺憾千万ながら所有地及び境内地の一部を割愛し、処分代金を以て工事費の半額を獲得し、半額を寄付募金によることに決し、本設計に着手するとともに、神社本庁に対しては財産処分の申請書を提出し、昭和三十九年五月十六日付にて承認を得、同年中に概ね土地処分を完了した。

工事設計は大分市中島一条阿部設計事務所阿部清氏に依頼し、北九州方面及び京阪神方面の神社を視察するなど慎重を期し、昭和四十年三月末に設計書の作成を終わった。

工事請負担当者は指名入札により昭和四十年五月十六日大分市中島八条、株式会社佐伯建設社長、川崎喜一氏に決定着工することになった。

工事の経過

一、起工報告祭	昭和四十年六月二日
一、儀式殿（一時仮拝殿）	同年　六月九日
一、神楽殿地鎮祭	同年　六月二十六日
一、手水舎地鎮祭	同年　八月二十一日
一、仮殿竣功新殿祭	同年　十月五日
一、仮殿遷座祭	同年　同日夜
一、本殿地鎮祭	同年　十一月八日
一、本殿上棟式	昭和四十一年九月十五日
一、本殿竣功新殿祭	昭和四十二年十月十八日
神楽殿手水舎竣功祓式も同時に行う	
一、本殿遷座祭	昭和四十二年十月十八日
一、本事業竣功奉祝祭	同年　十月十九日より三日間

寄付金募集については、春日神社戦災復興奉賛会を組織し、同会名をもって募金することになり、昭和四十年二月十一日発起人会において、大分商工会議所会頭草本利恒氏を会長に推挙し直ちに同氏の承諾を得、更に会長の承認を得て同年三月二十七日の発起人会で副会長に安藤槌蔵、岩尾作五郎、佐藤信一、坂巻六助、市丸伍兵衛、橋本新一、吉村益次の七氏を選び、理事、評議員、委員、顧問等を詮衡し、同年六月一日付でそれぞれ委嘱状を発送して会の組織を終り、寄付募集に着手した。

爾来二ヶ年有余に亘り会長を中心として、神社総代、奉賛会役員各位の熱心なる勧誘と市内各種会社、団体、氏子崇敬者の同情満ちた御協賛を賜わり、事業の完遂を見るに至り、誠にありがたく再拝拍手拝跪して感謝の誠意を捧げる次第であります。

宮本末彦先々代宮司手記「おもいで」より

春日神社研修旅行に参加して ～宮崎・鹿児島方面～

春日神社　総代　小橋　雅治

私は平成二十五年に大分市中央町商店街振興組合の理事長となり、阿部前理事長の後を引き継ぐ形で春日神社の総代をさせていただいております。今年は春日神社の戦災復興五十年との事で、祖父多一郎が五十年前の復興事業に関わっていたことを思い出しました。

神社の研修旅行は今回で三度目の参加になります。総代となって新たな世界を知ることとなり、その体験を楽しく感じています。旅行当日は神社からバスにて東九州自動車道を一路南下しました。

最初に都城市の神柱宮を正式参拝し、高さ二十五メートルの日本一の大鳥居を見学しました。次に正式参拝いたしました霧島神宮では、火山の麓に立地しているため噴火の巻き添えに遭い、度々社殿が炎上した話などを伺いました。山の杜の中に在って、厳かな空気を感じました。

阿蘇神社にて被災の説明を受ける

宿泊は鹿児島市内の城山観光ホテルでした。夕食の時に、宮本宮司をはじめ同席の方々と地元鹿児島の酒の話で盛り上がりました。種子島・屋久島より北が芋焼酎、奄美大島から与論島の間は黒糖焼酎、沖縄は泡盛と…。

翌日は鹿児島市内の照國神社に正式参拝をいたしました。資料館では明治維新前後の島津家の活躍や日本の国旗の原型が幕末の薩摩藩の軍艦旗であることを知りました。

その後、九州自動車道を北上、熊本市内を経て阿蘇神社を参拝いたしました。ここを訪れたのは二度目ですが、テレビで見ていたとはいえあの立派だった楼門などが熊本地震により全壊しているのを目の当たりにして驚きました。

二日間の研修旅行では楽しい時間を過ごすことが出来、また新たな発見もしました。来年も是非参加させていただきたいと思います。

春日神社敬神婦人会の活動

○吊灯籠奉納

此度の戦災復興記念大祭にあわせ春日敬神婦人会より吊灯籠一対の奉納がありました。御社殿御扉の前には吊灯籠が掲げられておりますが、経年の傷みも見られてきたことから今回の奉納となりました。おかげを持ちまして御神前の佇まいは申殿格子天井絵とも調和して、荘厳さがより一層引き立つようになりました。また、元々殿内にあった吊灯籠一対は修理のうえ移設し、社務所玄関上に取り付けています。

○国旗小旗作り

去る十一月十日と十二月一日の二日に亘り、国旗小旗二千本の奉製作業を行いました。今回の作業は一般財団法人日本文化交流財団が大分県神社庁を通じて依頼してきたもので、「我が国の伝統精神を踏まえた社会有為の人づくり運動を推進する」という趣旨のもとで国旗奉製の啓発活動を行っています。

このようなことから全国の敬神婦人会を始め様々な団体の手により作業が行われていて、奉製された小旗は主に各都道府県にお越しの皇族方を始め、総理大臣等をお迎えする際などに使われており、テレビや新聞等の報道でご覧になった方も多いのではないでしょうか。

大分県に於いては、平成二十七年に天皇皇后両陛下が御来県され、県民をあげて小旗を振りお出迎えしています。

蓬莱雅楽会の活動

平成三十年が国東半島一帯に広がる仏教信仰が始まった六郷満山の開山千三百年にあたり、十二月二日夕刻に行われた富貴寺での記念法要に雅楽として参加し、管絃と舞楽「陵王」「落蹲」を演奏しました。

会場である富貴寺の国宝「大堂」前は多くの人で埋め尽くされ、ライトアップされた境内特設舞台での演奏は、大変冷え込む中でしたが、神と仏の信仰が混交していた頃の法要が再現されたような夜でした。

初詣のご案内

例年三が日の初詣参拝者は約三十万人を数えます。本年もこの多くの方々をお迎えするべく準備にかかりました。熊手や福笹・干支土鈴など数多くの縁起物がある中、社務所内では神職巫女が手分けをして連日破魔矢の奉製作業を行っています。

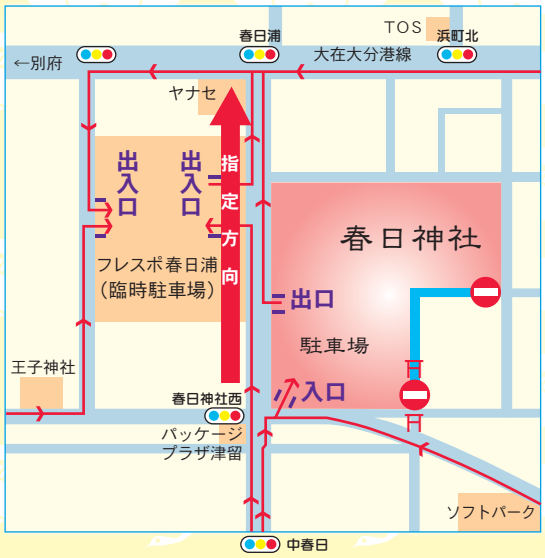
駐車場は境内春日公園を開放するほか、隣接の「フレスポ春日浦」も利用できますが、大晦日から周辺の進入路については交通規制が行われますのでご注意下さい。

◎指定車両以外進入禁止

12月31日午後9時より　1月7日午後3時まで

◎指定方向規制

12月31日午後11時より　1月1日午前5時まで
1月1日午前8時より　1月1日午後8時まで
1月2日午前8時より　1月2日午後7時まで
1月3日午前8時より　1月3日午後7時まで



国道10号線の中春日交差点から春日神社に向った場合、
右車線は春日公園内駐車場へ、
左車線はフレスポ春日浦駐車場への進行となります。

厄祓いのご案内

昔から日本では災難の起こりやすい年廻りとして、ある時期の年齢を「厄年」として忌み慎んできました。厄年というのは、一般的に男性が25歳・42歳・61歳、女性が19歳・33歳・37歳・61歳で、特に男性の42歳、女性の33歳は大厄と言われ、その前年を前厄、当年を本厄、翌年を後厄として前後3年間を特に忌み慎む慣わしとなっています。

この厄年の年齢は、社会的にも重要な役割を担う時期にもあたります。厄年というのは現代の生活にもあてはまる人生の転回期であり、肉体的にも精神的にも調子を崩しやすい注意すべき時期とも言えるでしょう。

謙虚に、感謝の心で神様に手を合わせ、神々のご加護で無事に過ごせるようお祈りください。神社では一年を通して厄祓いのご祈願を奉仕いたしております。

〈平成30年の厄年表〉※年齢は数え年

女性						男性				
61歳	37歳	34歳（後厄）	33歳（本厄）	32歳（前厄）	19歳	61歳	43歳（後厄）	42歳（本厄）	41歳（前厄）	25歳
昭和33年生	昭和57年生	昭和60年生	昭和61年生	昭和62年生	平成12年生	昭和33年生	昭和51年生	昭和52年生	昭和53年生	平成6年生

※ご祈願料はお一人様五〇〇〇円となります。
※男女の数え61歳は還暦のお祝いの歳にも当たります。
同窓会など団体での申し込みの場合は、社務所までお問い合わせください。